トロールたちのクリスマス

1. あるクリスマスイブのことです。町外れの角にある小さなお家には暖かな光があふれていました。部屋の真ん中には、キラキラした星や、お菓子やリンゴで彩られた大きなクリスマスツリーが輝き、テーブルの上にはキャンドルが灯っています。玄関の外でちょっと物音がするたびに、子どもたちはじっとしてはいられないようです。しばらくすると、お待ちかねのサンタクロースがやって来て、中に入るといつものように尋ねました。「みんな、良い子でいたかな？」子どもたちは声をそろえて答えました。「もちろん！」

2.「そうか、そうか。もしみんなが良い子でいたなら、ちゃんとご褒美をもらわないとね。けれど、みんなに言わなきゃならないことがあるんだ。今年のクリスマスプレゼントは、去年の半分ほどになってしまうんだよ」「どうして？」子どもたちは尋ねました。「ちゃんと説明しないとね」サンタクロースは言いました。「私は遠い北の国からやって来たんだ。そこでたくさんの貧しい人たちの家をのぞいたら、クリスマスイブに食べるパンのかけらすらない、小さな子どもたちがいてね。私はプレゼントの半分をその子たちにあげてきたんだよ。どうだろう、私がしたことは正しいことだとは思わないかね？」

3.「思う、思う、とっても親切だと思うな」子どもたちが口々に言いました。しかし、フレドリクとロッタだけは黙り込んでいます。これまでフレドリックは 20 個の、ロッタは 30 個のプレゼントをもらっていました。今までの、たった半分しかもらえないだなんて！とっても少なくなった気がします。
「どうだろう、正しいことだとは、思わないかな？」サンタクロースはもう一度尋ねました。

4. フレドリックはかかとでくるっと後ろを向くと言いました。「なんてクリスマスだ、がっかりだね！お前からプレゼントをもらうより、お化けのトロールの方がよっぽど良いクリスマスを過ごしてるよ！」ロッタは、泣きじゃくりながら言いました。「クリスマスのプレゼント、15 個しかもらえないの？トロールの家にいる方が、ずっとずっとマシだわ！」「なるほど、そうか。他に願いごとがないのなら、すぐに連れていってあげるとしよう」サンタクロースはそう言うと、フレドリクとロッタの手をつかみ、嫌がる二人をむりやり引っ張っていきました。

5. 一瞬のことでした。おそらく空を通りぬけて来たのでしょう。何が起こったのか分からないまま、子どもたちは暗い森の中、降り積もった雪山の真ん中に立っていました。とても寒くて、吹き荒れる雪のせいで周りに立ち並ぶ大きなモミの木もほとんど見えません。それに、森のすぐ近くからオオカミの遠吠えが聞こえます。いっぽうサンタさんは、時間もありませんから、すぐに仕事へ戻っていったようです。なにしろフレドリクやロッタよりも優しい、たくさんの子どもたちを訪れなければいけませんから。

6. 子どもたちは競うように、わんわんと泣きはじめました。しかし、子どもたちが泣けば泣くほど、オオカミの遠吠えは近づいてきます。「おいで、ロッタ」フレドリクは言いました。「どこか、暖をとれる森小屋を探そう」「木の間に、かすかな灯りが見えるわ。そこに行きましょうよ」ロッタがそう言うと、フレドリクが答えました。「それは灯りなんかじゃないよ。枝に下がったつららが、暗闇で光って見えているだけさ」「目の前に、大きな山が見えるわ。ね、これってもしかして、物語に出てくるサンポ・ラッパライネンが、クリスマスにオオカミの王様の背中に乗った、あのラステカイネンの山じゃない？」「あんなの、デタラメだよ」フレドリクは答えます。「それに、ラステカイネンの山は、僕らの家から 70 マイルもあるじゃないか。ほら来て、山に登ろう。そうしたら周りもよく見渡せるだろうから。」

7. 暗く、大変な道のりでした。２人は足をとられながら雪だまりを抜け、茂みや倒れた木々を乗り越え、ようやく山のふもとへたどり着きました。そこには小さな扉があり、隙間から灯りのようなものが、きらめいています。フレドリクとロッタが光に向かって進んでいくと、びっくり仰天！自分たちがラステカイネンのトロールの洞窟にいることに気づいたのです。しかし後戻りするには遅すぎました。それにすぐ近くをオオカミがぐるりと取り囲んで、入口の扉から頭がちらちらと見えています。

Z.Topelius, V.Tarkiainen & V.Juva, PEIKKOJEN JOULU (WSOY, 1958), 日本語訳 TERESIANKANTELE (MT)

8. フレドリクとロッタはびっくりして、入口の近くで立ち止まりました。目の前の大広間では、トロールたちがクリスマスパーティーをしています。おそらく何千匹、わんさかいるその生き物は、どれもとても小さく、人間の腕の長さほどの大きさで、全身は灰色、しわくちゃしています。そしてサンポ・ラッパライネンのお話で語られていたとおり、とてもすばしっこく動きまわっています。

　トロールたちは暗闇におびえることはありません。闇の中ではろうそくの代わりに、凍らせたホタルや立枯れた木が薄く輝いています。ところが、キレイな花火をこさえようと、大きな猫の背中を撫でてパチッと火花を起こしたとき、あちこちで叫び声があがりました。「おいコラ、やめてくれ！明るすぎる！目がつぶれちゃうじゃないか！」

9. 世界中のトロールたちはみんな、光を怖れて嫌がり、もし目にすることになったら、本性をむき出しにして怒ります。ですから、１年の終わりが近づくにつれて昼がだんだんと短くなり、夜がどんどん長くなると、トロールたちは盛大なお祝いして過ごします。そして毎年クリスマスが来るたびに、もう決して昼は訪れず、永遠に夜が支配する世になるという自分たちの願いを思い返しては、その実現を信じているのです。トロールたちは心から喜び、山の奥深くで踊ってお祝いします。なにしろ信仰のない者たちですから、クリスマスの本当の意味は知りません。代わりに、ちょっと変わった独特な方法でお祝いしているのです。

10. トロールたちが寒さに強いことにも気づくはずです。寒い冬の夜だというのに、みんなで氷づけのお菓子を出しあっています。おまけに、口に入れたときに火傷しないよう、まずふーふーと冷ましているのです。他にもヘビの舌やクモの足といったごちそうが並び、クリスマスツリーは氷の結晶から作られています。それに、あるおじいさんトロールがサンタクロース役をつとめています。

11. 巨大でおそろしい山の王は、今年はトロールの洞窟にいませんでした。トロールたちは、王が新たな地を支配するためにスヴァールヴァル諸島へ移っていったと思っていました。山の王はかつての自分の王国を、罪と暗闇を統べる王子に遺していきました。大広間の真ん中に座っている、新たな王の名はムンドゥスと言いました。彼の隣にはトロールの女王、カロが座っています。それにしても”カロ”だなんて、犬の名前みたいですね。王と女王はどちらも、長いヒゲを生やしていました。他のトロールたちと同じように、彼らもクリスマスプレゼントを贈り合いました。ムンドゥス王はカロ女王に、木で作ったとても長い足をプレゼントしました。その足に上がると、世界でもっとも背が高く、気高い女王になることができます。カロ女王はムンドゥス王に、世界中のろうそくを消してしまえるように、とても大きなろうそく消しをプレゼントしました。きっと多くのトロールが、こんなろうそく消しを自分もプレゼントに欲しいと思ったことでしょう。

12. それからムンドゥス王は玉座から立ち上がると、集まっているトロールたちに力強いスピーチをしました。王はこう宣言しました：「間もなくすべての光が消え去り、暗い影が永遠に地上すべてを覆い、トロールたちが世界を支配するだろう！」トロールたちは力いっぱい叫びました。「バンザイ！偉大なる我らがムンドゥス王！美しきカロ女王！罪と闇の世界よ、永遠なれ！バンザイ！バンザイ！」

13. 王は言いました。「我が忠実なる番人はどこだ？この世にもはや、いっぺんの光の筋も見えないことを、確かめに行かせた見張り番は？」番人がやって来て言いました。「王様、あなたの力は偉大です。どこもかしこも真っ暗です！」

　しばらくして、再び王は言いました。「我が番人はどこにいる？」番人がやって来ました。「王様、はるか彼方の地平線に、小さな小さな光の粒が見えます。まるで黒い雲の隙間からのぞく星のきらめきのように」すると王は言いました。「山の頂に見張りに戻るのだ」

14. しばらくして、再び王は言いました。「我が番人はどこにいる？」番人がやって来ました。しかし王は、番人が恐怖にふるえ、目が見えなくなっていることに気がつきました。王は尋ねました。「我が腹心の番人よ、どうしてふるえているのだ？なぜ目が見えなくなったのだ？」番人は言いました。「王様、雲が消え、星が、どの星よりも大きく明るい星が、天空でまばゆいばかりの光を放っています。それを目にしたから、ふるえているのです。目が見えなくなってしまったのです」

15. 王は言いました。「これは、一体どういうことだ？今や光は消えるのではないのか？闇の支配が永遠に訪れるのではないのか？」しかしトロールたちは、みんな黙ったままふるえて立ちつくし、誰も答えようとはしません。そのとき、あるトロールが言いました。「我らが王、このドアの近くに人間の子どもが２人います。彼らに聞いてみましょう。我らよりも多くのことを知っているでしょうから」

16. 王は言いました。「子どもたちをここへ！」すぐにフレドリクとロッタは王の前へ引きずり出されました。２人がどんなにおびえてその場に立っていたか、あなたも想像できるでしょう。女王は２人がおびえていることに気づくと、玉座のそばに立っていた小人のおばあさんに言いました。「哀れな子どもたちに、ドラゴンの血ジュースとフンコロガシの殻スナックをお出しなさい。気分も落ち着いて、話もできるでしょう」「さあ、お食べください！どうぞ、お飲み下さい！」小人のおばあさんは言いました。けれどもそんなもの、ちっとも欲しくなんてありません。

17. 王は子どもたちに言いました。「お前たちは今、私の支配下にいる。そして私はお前たちを、カラスやクモに変えることだってできる。だが、お前たちに謎々を出そうじゃないか。もしお前たちが謎を解くことができたなら、傷つけることなくお家に帰してあげよう。どうだ、やってみるかね？」「やってみます」子どもたちは答えました。

18.「よろしい」王は言いました。「一年でもっとも暗い夜の真っただ中に、光がまたたいているのはどういうことだ？すべての光が消え、暗闇とトロールが世界を統べる季節だというのに？はるか東の空に、どの星よりも明るく輝き、我が力を破滅へ導かんとおびやかす星が光っているのだ。子どもたちよ、言ってみよ。この星は何を意味しているのだ？」

ロッタが答えました。「それはクリスマスの夜に、ユダヤの国ベツレヘムの上空にのぼり、全世界を照らす星です。」

19.「なぜこんなにも輝いているのだ？」フレドリクが言いました。「なぜなら、全世界を照らす光である私たちの救い主が、今夜生まれたからです。そしてこの日から光は輝きを増し、再び昼が長くなるのです」王は玉座の上でふるえはじめ、再び言いました。「今夜生まれたという、その光の主の名は何というのだ？暗闇から世界を救うために来たという、その者の名は？」子どもたちは言いました。
「イエス・キリスト、神の御子」

20. ２人が言い終わらないうちに、山全体が激しくふるえ崩れはじめました。嵐のような突風が大広間に吹きすさび、玉座を倒してしまいました。煙のように、あるいは影のように、星の光がすうっと満ち渡っていくと、氷の結晶で作られたクリスマスツリー以外はみんな消え去ってしまい、残ったツリーもキラキラと溶けだしました。そして天空では、天使たちの歌声がまるでカンテレのように鳴り響きはじめました。

Z.Topelius, V.Tarkiainen & V.Juva, PEIKKOJEN JOULU (WSOY, 1958), 日本語訳 TERESIANKANTELE (MT)

21. しかし子どもたちは顔を両手で覆い、天を見上げようとはしません。突然２人は深い眠りに落ち、山の奥深くで何が起こったのか、これ以上知ることはありませんでした。

目が覚めると、２人ともベッドに横になっていました。暖炉では火がパチパチと音を立てています。いつも子どもたちを起こしに来るカイサばあさんが、ベッドの横に立って言いました。「さあ起きて、教会に間に合うように、ほら！」

22. フレドリクとロッタは起き上がると、目を大きく開いてカイサばあさんをじっと見ました。コイツはひょっとして、腕の長さほどのヒゲを生やしたトロールのばあさんじゃないだろうか。僕らの口を割らせるために、ドラゴンの血ジュースと、フンコロガシの殻スナックを出すつもりじゃないだろうな。けれども、そんなことはありません。代わりに、焼き立てのパンとコーヒーが準備されていることに気がつきました。クリスマスの朝には、子どもたちもみんなコーヒーをもらえますが、これはいつもとは違う特別なことです。

リンリンと鈴のなる音が外から聞こえ、人々が教会に流れ入っていきました。どの窓辺には灯りがともっていましたが、何よりも教会がまばゆく輝いていました。

23. フレドリクとロッタは互いにめくばせをして、トロールのクリスマスパーティーに行ってきたことを、カイサには話ませんでした。おそらく信じないでしょうし、ただ笑って、２人は一晩中ベッドで寝ていたと言うでしょう。実際に何が起きたのか、あなたは知らないでしょうし、私も知りませんし、誰ひとり知りません。だけれど、もしあなたが知っていて、私も実は知っていたとしても、知らないふりをしていましょう。もし誰も知らないのなら、それはつまり、私やあなたが実は知っているということを、誰ひとり知らないということです。さて、今やあなたは、私が何も知らないことを私自身が分かっていることを、知っていることになりますね。あなたが何を知っているのか、私が知っている以上のことを知っているのか、それを知れたらどんなにか楽しいでしょうね。

24. ただひとつ私が知っているのは、文句ばかり言う子は、遅かれ早かれトロールの洞窟に行く羽目になるということです。そして、氷のかけらやドラゴンの血ジュース、フンコロガシの殻スナックを、家でないがしろにした素敵なプレゼントの代わりにもらうことになるのです。フレドリクとロッタは、トロールたちのクリスマスを決して忘れませんでした。２人はクリスマスプレゼントを受け取りませんでしたが、それだけではありません。彼らは自分の行いを恥じていたので、クリスマスの朝、教会で席についても天を見上げようとはしませんでした。そこは光あふれる美しい場所、ベツレヘムの星の光が降り注ぎ、すべての地上の灯りを照らしています。その光は今、優しい子どもたちみんなの目を喜びに輝かせています。フレドリクとロッタはそのことに気がついていましたが、決して天を見上げませんでした。２人は良い子になろうと心に誓いました。さて、２人は誓いを守っているでしょうか？私には分かりませんが、そうであって欲しいと思います。もし２人に会う機会があれば、ぜひ聞いてみてください。